

# 広告

企画・制作 / LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会



スーパーバイザー  
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。



エリア・コンサルティングでサポートメンバーの下川氏と

## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出すとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。京都府選出の匠、着物作家・加藤洋平さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか?」「地域のオリジナリティーはあるか?」「コンセプトやターゲットは明確か?」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスを

プロダクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏(建築家/東京大学教授)、ゲエナエル・ニコラ氏(デザイナー)、清川あさみ氏(アーティスト)、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト/アート・プロデューサー)、下川一哉氏(意匠研究所)らをサポートメンバーに発足。第1回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。



1月18日、プレゼンテーションにて

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:レクサス)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

行われ、匠は約1年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

### 風をはらんで 美しい色彩が踊る

窓を開けて風が吹きこめば、ふわりと揺れる美しいグラデーション。「風彩染」という技法で手染めされたレースカーテンは、やさしい風情をもたらす。従来のカーテンはプリント生地を継ぎ足すので柄が微妙にズレているが、加藤さんのカーテンは着物の絵羽という柄合わせテクニクを取り入れているため、縫い目を越えて自由な流線形がたなびく。風によって柄がいつそう美しく踊り、日常に幸せな気持ちをもたらしてくれる。



プロダクトに込めた思いを語る加藤さん

濡らした絹に色を引いてほかす、濡れ描き友禅による風彩染は、加藤家の先代が編み出した。独自の技法を受け継ぐ着物工房の4代目、加藤さんだ。以前から「着て動く姿が美しい」と評価されてきたので、そんな特徴を生かせるものに染めたいと思い、風で動くカーテンに至ったという。

「風を自然現象だけでなく、心で感じられるのは日本人だけです。ふわりとした空気感や感情を染めで表現し、人それぞれの『風』を出したかったのです。また、良い風が吹いてくるようにとの願いもこめました」と、加藤さん。



バイヤーと商談



着物の技法で手染めした「風を染めたレースカーテン」

加藤 洋平 京都府 / 着物作家

### 未知の分野は つまずきの連続

プロジェクトの始まりは、まず揺れる美しさと柄の透け感にこだわって素材を吟味。家庭で手入れしやすいこともふまえ、ポリエステルレースに決めた。そこに、実用面から最も退色しにくく堅牢度の高いカーシート用染料で、染めを施すことにした。

ところが着物業界では誰もやったことのない挑戦だけに、正確な方法を教えてもらえない人がいない。例えば絹の染料は、染色時と仕上がりの色にそう変化はない。しかし、ポリエステル染料は蒸してはじめて発色するため、染めているときは仕上がりの予測が立ちにくい。濃度やぼかし加減などを研究するたびに一つ一つ、きっちりつまずいた。こんなに失敗するものか、違う業界のものに手を出したのではないかと思っただけだ。結局、思い通りの色を出すのに8カ月かかり、プレゼンテーションの直前にやっとそれらしいものができた。

### 一つの文化に なり得る成果

試作品はそれでも色が濃く出すぎたと思っていたので、小山氏に「これは子ども部屋用だね」といわれて納得した



ぼかし染めで心の風を描く匠の技

戦という思いと、工房のふだんの着物の仕事に影響がないよう一人挑戦し続けた。また、プロジェクトを通じて全国の匠と知り合い、刺激し合える仲間ができたことにも感謝しているそうだ。

そうだ。ようやく完成したプロダクトは、下川氏から「一つの文化になるんじゃないか」と評価され、今までの努力が報われた気がした。「他にも柄の生かし方など、鋭い指摘を頂戴したのがありがたかったです」と、加藤さん。かねてより構想にあったレースカーテンという大作に挑戦できたのは、レクサスのプロジェクトということで決断できたから。家族も応援してくれたが、あくまで自分の挑戦だ。

### 着物から離れず 新しい世界を広げる

そして改めて、着物を染めることが好きだと加藤さんは実感したそう。



匠の心に吹く風は京都が育んだもの

「着物の技術を他に生かしてプロダクトができ、幅が広がることはわかりました。でも、着物で着る人の人生に関わらせてもらいたいし、着物から離れることなくやっていきたい。風彩染の持つ情緒は、京言葉の『はんなり』に通じる心そのものです。後継者を育てて技法を受け継いでもらい、京都の伝統工芸の一つである着物を振興していければ、地元にも貢献できると思います」と、加藤さん。

小山氏から「のれんも良いね」とアドバイスがあったので、さっそくアイテムを増やしたが、今後はダンサーのコスチュームや民族衣装などにも応用し、世界へ発信していきたいとのこと。レースカーテンをきっかけに新しいワクワクを生み出しながら、常に良いものを創れる状況でいられるよう技術や工房の運営を含めて、周りを整えさせまな人と関わり続けたいと加藤さんは願っている。



「絵羽柄」という柄合わせの技法で縫い口が繋がるのは手染めならではの



加藤 洋平  
京都府 / 着物作家

京都市出身。同志社大学卒業。「素描友禅」と、「濡れ描き友禅」を発展させた「風彩染」という独特の技法を持つ着物工房の4代目。2008年週刊少年ジャンプストーリーネーム部門にて賞金獲得。『ゼクシィ』に自身の結婚式の引き振袖を掲載。2013年伝統的工芸展入選。2015年京手描き友禅作品展にて京都リビング賞受賞。宝塚歌劇団のスターも着用している。

